

---

# 私と従兄弟と巻き込まれた？皆様

山田

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私と従兄弟と巻き込まれた？皆様

### 【Nコード】

N3715U

### 【作者名】

山田

### 【あらすじ】

2000年はとうに過ぎ去った2XXX年。

宇宙で暮らす者達が時代の最先端となって人類を引っ張っている今の世の状況。人間って結構すごいところまで来たんだなあと思っている。でも、一般市民の私にはあまり関係ない話。そんな、29才で干物女である私に、おばが頼み事をしてきた。どうやら従兄弟のことらしく……。

すぐに止める事になるだろうと思っていたVRMMO、色々あって結構頑張るはめになってしまった女の話。

## インストール

2000年はとうに過ぎ去った2XXX年。

宇宙で暮らす者達が時代の最先端となつて人類を引っ張っている今の世の状況。

人類と同じかそれ以上の知能を持つ宇宙人とは未だ出会ったという情報は聞かないが

なんとたら星へ着陸成功、だとか、かんたら星へ移住可能となつた、等の情報は少し耳に入ってくる。

地球の日本という国に住んでいる、ただの社会人には遠い話で、あまり実感は湧かないけど、人間って凄いなあとは日々思っている。

昔では考えられないような技術が進んでいるのはわかるが、恩恵にあたる者は一握り。

私のような一般市民には別の星へ移住する事も、宇宙船に乗る事すらも出来ない。

まあ、貯金を使えば宇宙船に乗って、近くの星へ行つて帰ってくるだけなら出来るが、興味もないし酔いそうだから乗りたくもない。未だに価格が高い理由は一般市民が易々と外の星へ出て行かないように規制しているためだとか、色々推量されているが。何にせよ、金持ちしかほいほい乗れない代物だから、私に縁が無いのは確か。

しかし、ほんの少しでも私たちの手に取るものにも進歩の影響があつて、昔では実現する事が不可能だったものが、今では一般家庭に普及していたりする。

例えば、空中を移動する自動車、バイク。

あと人造人間も存在して、彼らは人間と同じ扱いを受け市民権まで得ていたりする。

数は少なく、今までであった事はないが、映像越しになら見た事がある。

あとは、良く使うもので言えばバーチャルリアル機器。実際、手にとって物を見ることができ、通販で服を買うのに重宝している。

そして、そしてそして

今回私を悩ませる事となる原因の機械。

いや、ゲーム機器だ。

バーチャルリアリティプレイ専用ゲーム機械（ネットプレイ可能設備搭載）。

たしか、VRPG機器と略されていたはず。

この機械を使って遊ぶゲーム、複数人数同時参加型バーチャルリアリティプレイネットゲームの事は総称してVRMMOと呼ばれていた。

少しお値段は高いが、背伸びをすれば買えないこともない。

が、私は自ら進んで買うという事はなかった。

ゲームは好きだけど、そこまでのめり込むほど好きではなかったからだ。

私は自他共に認める干物女。

会社では一応キャリアウーマンのバリバリ働けていると思っっている。

後輩からも結構頼りにされているし、同僚からお礼も時々言われるし。

でも、家に帰れば一転。

何にもする気が起きない。

休みの日はビール片手に愛猫をひざに乗せて、目を楽しませるため

に買った”自然大好き庭園ミニチュアセット”を眺めている。  
寂しい人生だと思われるだろうが、自分的には満足しているのでこ  
れでいい。

年齢も29となり、そろそろ人生の計画でも少し立てようかと思ひ  
電子書籍の中から老後の事について書かれた本はないかと探してい  
ると。

誰かが家に訪ねてきた。

私は実家住まいであるため、両親と一緒に3人で暮らしている。  
母が玄関で訪ねてきた誰かと話している。

私のいる居間まで声がもれ聞こえ、誰が来たのかすぐにわかった。  
その誰かは母と一緒にこちらまでやってきて、笑顔で私に挨拶をし  
てきた。

「奈緒ちゃん元気してた〜?」

母の妹の和子おばさんだ。

いい年のはずなのに、可愛いしゃべり方で清楚なおばさまだ。

「こんにちは。おばさんも元気そうですね。」

「そうなのよ〜。それだけが取り柄だからね。」

おばさんはそう言うのと、いすに座って、ケーキを机に置いた。

「これ、おいしいの。奈緒ちゃんケーキ好きだったよね。いっぱい  
食べて!」

ケーキと分かった瞬間テンションがあがったが、和子おばさんの言  
葉で一気に下がった。

「おばさんが、私の機嫌をとる時ってお見合いの時しかないんだけ  
ど。」

半目でおばさんを見ると。

あらやだ、と手を頬に当てた。

「そうだったかしら〜。」

「うん。」

「あら。でも、今日は違うのよ。本当に。」

母が、台所からお皿とフォークを持ってきた。

「あら、違うの？残念。」

母がそういうと、和子おばさんは笑う。

「それはまた今度。今日はね。息子の事についてお願いがあったよ。」

母が反応する。

「息子って、忠志くんのこと？確か高校2年生だったかしら。」

「そうそう。忠志の事についてなの。」

おばさん2人が話しているのを聞きつつ、ケーキに手を伸ばす。

「なーに。まさか、不良になっちゃったとか？」

「違うわよ。むしろいい子。うちの子は凄いいい子よ。」

母は笑った。

「どこの家庭もそう言うわよ。」

おばさんも笑う。

「そうなんだけど、でも本当にいい子なのよ。」

「じゃあ、問題ないじゃない。」

「うーん。それがね。3ヶ月前にあるお願いをされてね。それを了承しちゃったの。」

「お願い？何？」

「えーと、リアルなんとかゲーム？よく覚えてなくて上手くいえないけど。そのゲーム、未成年は親の承諾が要るらしくて。」

私、いいわよってサインしちゃったのよ。」

私はケーキを含んだまま、会話に口をはさむ。

「やっぱり駄目って言えばいいんじゃないの？」

和子おばさんは困った顔をする。

「友達もやってるっていうし。素行が悪くなっただってわけじゃないし。今更駄目って言うのもねえ。」

母はあきれた顔をする。

「なら、いいじゃないの。」

「でもね〜。ちょっと心配じゃない。テレビで良くないニュースとか流れるのを見ると。」

確かに、時々VRMMOについて取り上げられて、批判するような内容のものもある。

和子おばさんは私にケーキの箱を近づけ懇願するように言う。

「少しいいの。奈緒ちゃんがちょっと忠志がどんな事をしているのか様子を見てきてくれるだけでいいのよ。」

「なんで私・・・。」

「だって、私と姉さんじゃあゲームなんてした事ないし。それに比べて、奈緒ちゃん前ゲームしてたじゃない。あと・・・休みの日、いつも暇そうにしてるし。」

確かに。

「うーん。」

私が唸ると和子おばさんは畳み掛けてくる。

「ゲーム機のことなら心配要らないわよ。私がちょっとやってみようと思っただけなのがあるの。すぐに挫折しちゃったけど。」

「うーん。」

「奈緒ちゃんが通販じゃ手に入らないって言ってた。地方にあるケーキ屋さんのお菓子、今度買ってきてあげる。」

「うーん。」

「・・・もうあんまりお見合いの話もってこないから。」

「分かった。引き受けましょう。」

母が非難の声を上げたが、私たち2人は無視して今後の話を進めた。

とある休日の日。

それは届いた。

和子おばさんが買っていた、VRPG機器。

説明書は1枚の小さな紙にアドレスが書いているのみ。

フルフェイスヘルメットに良く似た形をしている。

事前に使い方を検索して学んでいたため、特にアドレス先へ行って読む必要はないだろう。

ただかぶるだけの単純なものだし。

ベットへ寝転がり、さっそく装着してみる。

すると、灰色の机と椅子が1つずつある空間へ飛ばされた。

飛ばされたというよりも、そう認識させられた。と言う方が正しいか。

VRは通販で活用しているためけっこう慣れている。

私は何もない空間へ向かって声を出した。

「ゲーム名は”Four islands fights and life”。検索。」

サインをした契約書を和子おばさんが保管していたためゲーム名は分かっていた。

数秒もたたないうちに、綺麗で正しく日本語の見本のようなしゃべり方をする女性の声が答える。

『ヒットしました。』

「インストールをお願い。」

『インストール前にお尋ねします。利用規約をお読み頂けましたか？同意されますか？』

目の前に長い文章がずらりと出てくる。

「読んだ。同意します。」

一応、利用規約には事前にざっと目を通しておいたから問題ない。

『了解しました。インストールします。少しお待ちください。』

お待ちいただく間に個人情報を入力をお願い致します。』

机の上に出てきた用紙の空欄に答えを埋めていく。

すべて終わるとその用紙は空間に溶け込むように消えた。

完了の声がまだ聞こえてこない。インストールまでまだ時間がかかるようだ。

「マニュアルか何か公式情報。検索。」

ゲームの情報はまだ仕入れてないから、何かないかと検索してみる。そこまで遊ぶわけじゃないから、細かい情報とか裏情報はいらなにかと思い。”公式”と条件を付けてみた。

『了解しました。』

・・・公式情報は3件ヒットしました。

1件は宣伝用の動画です。1件は基本操作説明の動画です。1件は基本操作説明の文章です。』

「じゃあまずは宣伝用から。再生。」

『了解しました。』

ヒットした3件の公式情報を見終わるぐらいに、インストールが終了した。

『今すぐプレイされますか?』

「その質問は保留。・・・ここにインしてから時間はどれぐらい経った?」

『2時間です。』

「分かった。じゃあ、今すぐプレイします。」

どうせ今日の休日も一日中家にいる予定だ、インしたのは9時だから今は11時。

1時間ぐらいプレイしたらお昼にしようか。

『了解しました。”Four islands fights and life”起動。行ってらっしゃいませ。』

視界がぼやけていき、白くなると今度は青い空間へと代わっていった。

どうやら、空に浮かぶ小さな島へと変わったようだ。

小さな島は直径5mほど。

高所恐怖症ではないが、あまり端へは行きたくない。

小さな島は10cmほどの草しか生えておらず後は何も無い。

『ようこそFour islandsへ。』

先ほどは女性の声だったが、このゲームは男の人の声で案内してくれるようだ。

『ゲームをプレイされる前に、あなたの名前と職業、分身の作成をお願いします。』

ではまず、お名前から。』

名前・・・考えてなかった。とっさに思いつくのは自分の名前でも、そのままはまずい気がするから、少しだけ変えようか。

「カタカナ文字でナナオ。」

そういつた瞬間、目の前に”ナナオ”と表示される。

『こちらのお名前はすでに登録されております。』

なんと。ではこれでどうだ。と再度言ってみるが、またもかぶり。

そしてその次も・・・。

そのやり取りを10回ほど続けて、ようやくOKがでる。

『では、”ランキュラス”で登録させて頂きました。』

自然大好き庭園ミニチュアセットで育てている花の名前だ。

『次は分身の作成です。』

すると、目の前に目や鼻、口などといったものが何もないツルツルで灰色の人形が目の前に出てきた。

『まず、性別・種族をお願いします。』

「女。獣族からネズミ型。」

先ほど基本説明を見といてよかった。今悩むことなく進める。

『了解しました。毛の色、瞳の色、身長、胸囲、足の長さ等、ご指示をお願いします。』

目の前で私の言うままに変わる人形を見てみると、少しわくわくして来た。

私は毛がある動物が大好きだ。

だから、獣族を迷わず選んだ。

猫か狼型が一番よかったのだが、手のひらとか肉球があって使いに

くそうだと思つたので、次に好きなハムスター、もといネズミ型を選んだというわけだ。

身長は160cm、ほっそり型で髪の毛は腰まで長くて色は紺色。瞳の色も紺色。従兄弟の事で隠密行動をとりそうだったので、あえて暗い色を選んだ。

人型だけど、鼻の先はネズミのように長く、尻尾もある、しかも全身は灰色の短い毛で覆われている。

自分で作っておいてなんだが、すごく綺麗でかつこいいい！

設定が全部終わったら、自分がこの中に入って動く事ができるのかと思うと、すごく興奮してきた。

『職業は？サブ職業は？』

「弓使い、サブは金の魔法使い」

弓使いを選んだのは、もし戦うのだとしたら遠くからぼちぼち攻撃して終わらせたいから。

金の魔法使いは援護魔法で攻撃力UPとか防御力UPとか属性を上げる魔法とか使えるようだ。

これは、適当に選んだ。色々あってどれを選んでも上手く使いこなせる自信がないから、金色ってなんかいいよね。的なノリで選びました……。

『では、最後の設定です。4つの島が最初の拠点ですが、どこを選びますか？』

私はその質問を聞いて啞然とした。

すぐに答える事ができなかった。

いや、脳が働いてもこの質問には答える事ができない。

最後の最後にやってしまった。

このゲームは4つの島から最初の拠点を選ぶのだが。  
自分達の島の領土を大きくするというコンセプトがあるこのゲーム。  
4つの島は争いあっていて、拠点が違つと別の島出身のものとは接  
触する事も難しく  
さらには攻撃までされてしまつようだ。

・・・さて

従兄弟はどここの島にいるのだろう。

## 島の名前

「そりゃあんだ、その従兄弟君が可哀想だわ。」

会社の昼休憩時間中に合コンへ誘われ、それを断ると

何か用事でもあるのかと聞かれたので。

特に用事はなかったが、ゲームを始めることになったと言い。

そのいきさつを同僚へ話すと、彼女は眉を寄せて私に説教をはじめた。

「しかも思春期でしょう？自分のテリトリーに勝手にこそそこそと入ってこられるなんて、凄い嫌じゃない？」

私はその言葉にはつと気づかされる。

そういえばそうだ。

身内がこそそこそと探りを入れるなんて、嫌な事以外なんでもない。

彼女はにっこりと笑い。

「ね。だから、そんなものしてないで、合コン行こう。合コン。」

そのお誘いはきっぱり断り、自分のデスクにもどり椅子に座ると左腕に付けた腕輪型の携帯パソコンがチカチカして、新着メッセージがあることを伝えていた。

一つボタンを押すと、メッセージが腕輪の上に浮かび上がる。

\*\*\*\*\*

奈緒ちゃんへ

先日の島？のことを、言われたとおりに忠志に聞いてみたんだけど上手く説明できなかつたみたいで、何言ってるのか分からないって

言われちゃった。

逆に色々質問されて、なんて話したらいいかわからなかったから。とっさに”奈緒ちゃんが忠志と同じゲームを始めたみたいよ”って言っちゃった。

ごめんね。

でね、忠志が喜んでね。奈緒ちゃんと話したいって言ったの。だから奈緒ちゃんが直接、忠志に聞いてくれると嬉しいな。

今日は家に食べるおいで。

姉さんには話しておいたから。

和子おばさんより

\*\*\*\*\*

うわー……。

色々突っ込みたいところはあったが、逆にこれはゲームをしなくていいチャンスなのでは？

一つの厄介ことから開放される可能性が見え、この日の仕事はいつもより少し気が楽に出来た。

会社を出ようとすると、一人の男の人に呼び止められる。

部署は違う、一つ年上の先輩だ。

短髪で、何かスポーツをしているのかすこしがっしりとした体に、180cmはあるだろう身長。

私は身長153cmなので、先輩は壁のように感じる。

だけど、怖く思わないのは先輩が出す雰囲気柔らかいから。少し微笑みながらハキハキとした口調で話しかけてきた。

「今から帰り？」

「はい。」

「よければ、これから食べに行かない？」

「すみません。今日は従兄弟の家に行くことになりました。」

私が断ると。

残念そうな顔をした。

「そっか。じゃあまた今度行こう。」

「はい。今度是非。」

手を振って分かれる。

時々こうやって誘ってくれるいい人なのだが、私に気を使ってくれなくても別にいいのにといつも思う。

一人でいる人が放っておけないタイプだろうか。

まあ、何にせよいい人だ。

私は通勤手段である原付に乗って、おばさんの家に向かう。

ちなみに、空中へ浮かぶタイプのものではない。

あれは、特殊免許が必要だから。

おばさんの家は私の会社から20分ほど離れた所にあるマンションだ。

玄関のチャイムを押すと、バタバタとかけてくる足音が聞こえ、一人の少年が顔を出した。

「奈緒ちゃん。ひさしぶり！」

従兄弟の忠志くんだ。

髪はさらさらで栗色。パツチリ二重で大きい目は和子おばさんに似たのだろう。

高校ではもててるんだろうなと思わせる姿をしている。

私も二重だが、お父さん似で、垂れた目をしている。

背が低く、垂れ目で、肩まであるくせつ毛の私。

対して忠志君は、背がほどほどに高く、パツチリ大きい目で、さらさらストレートな髪。

うらやましい。

どこその事務所へ勝手に応募をしてあげべきなのかどうなのか。うーんと考えていると。

「さ、あがってあがって。」

忠志君が私の腕をつかみ、ひっぱる。

「聞きたい事があるんでしょ？何でも聞いてよ！」

キラキラした顔をして聞いてくる忠志君を見ると、罪悪感で心臓が痛くなるよ。

いや、違う。今日はそれを終わらせに来たのだ！

おじさんは今日は残業があるらしく、まだ帰ってこないらしい。

3人で食卓を囲み、和気藹々とした食事が始まる。

「でね。お隣の佐藤さんがまとめてくれたのよ。」

「へー。佐藤さんにあつたらお礼言っとくよ。」

ただ、私には分からない内容が続いていて、親子2人だけでしゃべっているという状況だが。

というか、この親子めちゃめちゃ仲良いじゃないか。

私が探りを入れる必要は無いように思える。

和子おばさん特製のプリンを食べている所で私から切り出す。

「和子おばさん。忠志君いいこじゃないですか。」

「だから、いい子って言ったじゃないの。」

「え。俺の事？何、何の話。」

私にはっこり笑い、和子おばさんのほうへ向く。

「心配する必要なんかどこにも無いと思いますよ。私わざわざ見に行かなくても。」

するとおばさんにもっこり笑う。

「奈緒ちゃん。お見合いの話、今度持って行ってもいいかしら。」

私は笑顔のまま固まる。

おばさんは不思議そうな顔をしている忠志君のほうへ向き直る。

「奈緒ちゃんとゲームの話するんじゃないの？」

「ああ！そうだよ。奈緒ちゃんどこの島からはじめたの？」

力ない様子で私は答える。

「まだ、キャラクター設定でとまっている。忠志君はどここの島？」

「俺はね。」ノースポール”って島。奈緒ちゃんまだなら同じ島に来てよ。

色々支援してあげるからさ。同じギルドにも入ろう！けっこう大きいギルドだから人いっぱいいるし。

皆良い人たちだよ。」

・・・うんって言ったら、引つ張りまわされそうだ。

私は忠志君の姿と様子をちょっと見るだけでいいのに。

このガッツリ絡む感はなんだろう。

身内がテリトリーに入っても良いのか！？色々知られちゃっても良いのか！？

この人懐っこい少年の様子からすると、むしろ歓迎なのだろう。でも、私は遠慮したい。

「・・・ちゃんと操作を覚えてから、ね。」

教えてあげるのにと不満そうな忠志くと別れ、和子おばさんに約束を守るから和子おばさんも守ってと念を押し家に帰宅した。

## オープニング

カーテンの隙間から差し込んでくる朝日。

母がパンを焼いたのか香ばしい良い匂いがする。

今日は土曜日で会社は休み。

明日は日曜日でこの日も休み。

つまり2連休だ。

やったあー。

会社が忙しい時期は土曜日も仕事だが、今はその時期じゃないから土日の休みでゆっくりできる。

いや、間違えた。

いつものように、”自然大好き庭園ミニチュアセット”を眺めながら愛猫をなでて、ゆっくり過ごす事が出来ない。

それは、使命があるから・・・。

こう言うと渋々ゲームをプレイしようとしているみたいだけど、嫌なのは探偵もどきっぽく従兄弟を偵察することであって

ゲームは嫌いじゃない、実はむしろ好きな方なのだ。

学生時代は友達と一緒にオンラインじゃないけど、ゲームで盛り上がって遊んでいたほど。

でも、社会人になった時に時間がとれなくて止めてしまったのだ。

社会人になりたての頃は時間の使い方が下手で、休みは何をする気力もない日々が続く、自分の時間がうまく作れなかったから。

数年たてば時間の使い方がうまくなるかと思いきや、その日々が心地よいと思うようになり、現在に至る。

母が焼いたパンを食べ、顔を洗い、すっきりした所でまた部屋に戻

る。

さて、やるか。

ベットに寝転がり、ゲーム機を頭に装着する。

機械の横についでいる電源を入れるとすぐに起動が始まった。

目を見開くと先日と同じように、灰色の机と椅子が1つずつある空間へ飛ばされる。

「ゲームプレイ。」

何も無い空間へ向かって声を出すと、綺麗で正しい日本語を話す女性の声が答える。

『ゲームは1件あります。"Four islands fights and life"でよろしいでしょうか。』

「それをお願い。」

『了解しました。"Four islands fights and life"起動。行ってらっしゃいませ。』

画面が切り替わると、小さな島に先日作った自分の分身となるネズミ型の人間がポツンといた。

さて、ここまでが前回たどり着いたところだ。

男の人の声が私に質問をしてくる。

『最後の設定です。4つの島が最初の拠点ですが、どこを選びますか?』

・・・えーと。

忠志君に聞いていた島の名前を・・・何て言ってたっけ?

「4つの島のそれぞれの名前は？」

『ヤエムグラ、ピランジ、ステルンベルギア、ノースポールです。各島の特徴・説明は必要ですか？』

そうだそうだ思い出した。

「ノースポールをお願いします。」

『了解しました。では、最初は物語からご覧いただきます。劇場へ移動して下さい。』

瞬きをした瞬間に、小劇場と思われる場所へ飛ばされた。

『さあ、お好きな場所へ着席してください。上映します。』

椅子が縦横に6個ずつ並んでいたので、前から3番目、左から3番目、ほぼ中央へ座った。

すると、一気に劇場内が暗くなり、スクリーンが下りてきて映像が流れる。

プレイ前のオープニングが始まるのだろう。

ぼんやりとした光景から始まった映像は徐々にクリアになっていく。どうやら空を漂っている映像からはじまったようだ。

空には様々な島が浮かんでおり、その中の一つの島が画面いっぱいに映し出される。

島の中央には白い雪に覆われた大きな山があった。

その山の山頂に建てられている、コンクリートで出来た、頑丈そう

で敵かな雰囲気を持ったお城。

映像はそのお城の窓から内部に入り、大きな椅子に座った、白鳥、いや、鳥型の人間の所でとまる。

その上から下まで白一色の鳥人は鳥の頭をしているためか、男か女か分からない。

着ている物も体の線が分からないようなゆったりしたもので、判別がつかない。

その鳥人がゆっくりと話し始める。

『ヤエムグラ、ピランジ、ステルンベルギア、この3つの島にいる頭の悪い王が、この世界の島をすべて占領しようとしている。』

声を聞いても、性別が分からない。

男とも取れるし、声の低い女とも取れる。

私が、余計な事を考えている間も、鳥人は話を続ける。

『我は世界の頂点に立つ王になるうなどは思いはしないが。

他の島の王にすべての島を占領されるのは大変困る。

我が島は見ての通り、寒く、実りが少ない、生活する為にはこの島だけでは到底無理なのだ。』

画面は城の周りの風景を映し出す。

道を歩く人は寒さに凍え、畑を耕している人は育てた食物の小ささに嘆いている。

画面は王がいる広間に戻る。

『他の王に島々を占領される前に。我が戦士よ。

どうか、ノースポール島のために剣をとり、一つでも多くの領地を我等のものとし、食物を育て、ノースポール島を豊かな島にしようではないか。』

王が立ち上がり、右手に持った杖を振り上げる。

『我が戦士よ。君がノースポール島をより良い方向へ導いてくれる事を我は期待している。』

王がそう締めくくると、画面は上空に移り、”Four islands fights and life”とロゴが画面いっぱい

に映った。

4つの島それぞれにオープニングが用意されてて、それぞれの島にそれぞれの理由があって  
最終的には自分の島、または王のために領地を広げろって感じなの  
だろう。

ムービーが終わり、気づくと真っ白な雪景色の中にポツンと一人で  
立っていた。  
いつのまに！

気温を感じないが息をすると口から白い息が見える。

視線をおろして両手を見ると人間の手ではない生き物の手。

こげ茶色の服は大きいボタンを前で留めるタイプのお尻まで隠れる  
長さの上着。

七部丈の茶色いズボン。

足は素足。

気温は感じないが見ていると寒々しい気持ちになる。

『これから貴方のゲームが始まります。

ログイン継続時間は最長6時間です。

再ログインまで6時間の休息が必要となります。

体調に気をつけてゲームをお楽しみください。』

男の人の声でそう締めくくられ、しばらく待ってももう何も説明は  
なかった。

今から自由行動ってわけか。

前線で戦うために体を鍛えるのもよし。  
土地を耕し作物を育て自分の島を豊かにするのもよし。  
クエストをクリアする目的で遊ぶのもよし。

周りの風景を堪能する前に

視界に映って気になっていたこのキャラクターの鼻に触ってみる。

・・・微妙。

何かを触っている感覚はあるが、毛並みや動物を触っているという細かい感覚はない。

触られている感覚にいたってはほぼ無いと言っていいと思う。  
あーもつたいない。これで感覚があれば言う事無しでこの姿を堪能できるというのに。

まあ、でもこの姿は私であって、この長い鼻も今は私のものだ。  
動物に触る楽しみはなくなったが、お尻からはえている尻尾を見ると気分が上がってくる。

従兄弟の様子見ではじめてしまったこのゲーム。  
ちよっとクエストして遊ぶのも悪くないかもと思いはじめってしまった私でした。

## ロゲイン1日目

大抵どのゲームでも序盤から手も足も出ないようなモンスターが出てくるわけもなく

周りの景色を楽しみながら余裕で、いや、スキップしながら超余裕で進んでいたんですよ。

初心者用らしい半透明の矢印が示す町の方向へ。

それが

「逃げてー！ー！！」

って声があったと思ったら、次の瞬間に見えたのは地面。

そして、視界はグレー色の世界へ。

目と口は動くけど、体は少しも動かせない。

なんだこれ。

疑問でいっぱいになった頭に、ゲームを始めるときに案内してくれた男の人の声が聞こえた。

「貴方は死亡しました。スタート地点に戻ります。よろしいですか？」

え。私、死んだの！？

いつのまに！？

ちよっとパニックに陥っていると、シャランという効果音が聞こえた。

すると、もう一度同じ男の人の声で別の言葉が聞こえてきた。

「アンパンうまい」さんが貴方に復活の魔法をかけました。生き返りますか？

スタート地点か”アンパンうまい”さんの魔法、どちらを選択されますか？」

「アンパン・・・うまい??」

疑問系でつぶやいたのだけど、案内人は選択ととつたらしく

『貴方は”アンパンうまい”さんの魔法を受け、その場で復活します。』

と聞こえてきた。

光の粒が全身を覆い、ゆつくりと立ち上がったその先に見えた光景はグレーの景色ではなく、綺麗な色彩をした自然と土下座をする2人組み。

「あの。」

しばらく待つても微動だにしない2人組みに向かって思わず話しかけてしまった。

「申し訳ありません!!!!」

「ごめーん!」

勢いよく謝ってきた2人組み。

堅苦しく謝ってきた人は全身ガチガチに鎧を身に着けた大柄の男の人？顔は兜でわからないけど声が低いし大きいのでたぶん男の人。フランクに謝ってきた人は金髪に白い肌で妖精みたいなヒラヒラした服をきた女の人。

言い方に違いはあるけど、どちらも真剣に謝ってくれてる・・・けど。

「あの、何があったんでしょうか・・・。」

さっぱり分かりません。説明を求む。

妖精みたいな女の人が、苦笑いしながら私の疑問に答えてくれた。

「いや、うちのギルドの新人に良い装備揃えてあげようと思って広場までネームド引つ張ってきてたんだけど、その途中に貴方がいて範囲攻撃くらって死んじゃった」

てへっ、って言葉が聞こえてきそうなほどの決め顔をする女の人。

うーん。

可愛いが言ってる意味が分からない。

「本当に申し訳ありません。近道して道に出たのが不味かった。」

真摯に誤る男の人。

逆にこっちのほうが居た堪れなくなってくる。

「別にいいですよ。まだ始めたばかりだから、落とすものも経験地もありませんから。」

はははは、と乾いた笑いで答える。

死亡時のペナルティーは持っている手荷物（装備品は除外）から1割をランダムで無くし、経験地も減少する。

先ほど始めたばかりの私が持っている物など何も無い。

戦ってないから経験地ももちろんない。

「そう言ってくれと、ちょっと安心。」

ほっとする女の人。

「そういえば、何かをひっぱってきてたんですね。いいんですか

「？」  
きよるきよると周りを見渡すがそれらしいものは何もなし。

「ああ。別のやつが広場に連れて行ったんですよ。

ここに留めて置くと、ランキンユラスさんを生き返らせることができなかったから。

広場に行ったやつに分まで謝らせてください。」

もう一度頭を下げようとするのであわてて止めた。

「わー。もういいですから。それより、その広場に2人は行かなくていいんですか？

私にかまわず行ってください。」

そこまで酷いことをされた感覚はないのに、ひたすら謝られるのはちょっと辛い。

もういいから、行ってしまっ！という思いが伝わったのか  
男の人は遠慮がちに、それじゃあ。と去ろうと足を進めた。

が、妖精みたいな服を着た女の人は腕を組んでこちらを見たまま何かを思案していた。

「何でしょう。」

「もしかして貴方、初心者？」

言葉は疑問系だけど、確信したような言い方だった。  
そしてそれは当たりだ。

「はい。」

否定する意味がないので、正直に首を縦に振る。  
その後、また男の人の謝罪が続き、否定すればよかったと思うこと  
になった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3715u/>

---

私と従兄弟と巻き込まれた？皆様

2011年12月14日00時47分発行